

浄瑠璃寺の春

「やぶちゃん注…「浄瑠璃寺の春」は昭和一八（一九四三）年一月から『婦人公論』に連載を始めた「大和路・信濃路」で「浄瑠璃寺」と題して、同年七月号に掲載された。後に「浄瑠璃寺の春」と改題して、作品集「花あしび」（青磁社昭和二一（一九四六）年刊）に所収された。

このロケーションは昭和十八年の春である。四月十二日に多恵子夫人同伴で信濃から大和の旅へ出立、木曾路に入って木曾福島藪原に泊り、翌十三日、木曾路から伊賀を経、大和に入り、十四日には奈良ホテルに泊まっているが、この日が本作の作品内時間である。

底本は国立国会図書館デジタルコレクションの角川書店昭和二三（一九四

八）年刊の「堀辰雄作品集 六 花を持てる女」所収の正字正仮名のものを視認した。但し、一部の字空け、具体には、会話鍵括弧閉じるの後にある、視覚上の一字空けにしか見えない箇所は、実際に試みにそうしてみたところが、激しい違和感を生ずる箇所が^{しゅったい}出来ることが私自身にはつきり感じられたため、結果としては、この特異な字空きは無視することとした。

私の偏愛してやまない本作を、私はここで私のブログの六十五万アクセス突

破記念として公開する。【二〇一五年一月九日 藪野直史】公開当時、WordのUnicodeを使い慣れていなかったため、表記に粗漏があり、しかも所持する底本が書庫の藻屑となって沈んで発見出来なかったため、以上の国立国会図書館デジタルコレクションの同書で、再度、校正し直し、頭注も書き変えた。【二

〇二三年二月一日 藪野直史】

この春、僕はまへから一種の憧れをもつてゐた馬酔木あしびの花を大和路のいたるところで見ることができた。

そのなかでも一番印象ぶかつたのは、奈良へ著いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いてゐた蒲公英たんぽぽや薺なづなのやうな花にもひとりでに目がとまつて、なんとなく懐かしいやうな旅びとらしい氣分で、二時間あまりも歩きつづけたのち、漸つとたどりついた淨瑠璃寺じやうるりじの小さな門のかたはらに、丁度いまをさかりと咲いてゐた一本の馬酔木あしびをふと見いだしたときだつた。

最初、僕たちはその何んの構へもない小さな門を寺の門だとは氣づかずに危く其處を通りこしさうになつた。その途端、その門の奥のはうの、一本の花ざかりの緋桃ひももの木のうちへに、突然なんだかはつとするやうなもの、——ふいとそのあたりを翔け去つたこの世ならぬ美しい色をした鳥の翼のやうなものが、自分の目にはひつて、おやと思つて、そこに足を止めた。それが淨瑠璃寺の塔の錆さびついた九輪くりんだつたのである。

なにもかもが思ひがけなかつた。——さつき、坂の下の一軒家のほとりで水を洗つてゐた一人の娘にたづねてみると、「九體寺くたいじやつたら、あこの坂を上りなはつて、二丁ほどだす」と、その家で寺をたづねる旅びとも少くはないと見えて、いかにもはきはきと教へてくれたので、僕たちはそのかなり長い急な坂を息をはずませながら上り切つて、さあもうすこしと思つて、僕たちの目のまへに急に立ちあらはれた一かたまりの部落とその菜畑を何氣なく見過ごし

ながら、心もち先きをいそいでゐた。あちこちに桃や櫻の花がさき、一めんに菜の花が満開で、あまつさへ向うの藁屋根の下からは七面鳥の啼きごゑさへのんびりと聞えてゐて、——まさかこんな田園風景のまつただ中に、その有名な古寺が——はるばると僕たちがその名にふさはしい物古りた姿を慕ひながら山道を骨折つてやつてきた當の寺があるとは思へなかつたのである。……

「なあんだ、ここが淨瑠璃寺らしいぞ。」僕は突然足をとめて、聲をはずませながら言つた。「ほら、あそこに塔が見える。」

「まあ本當に……」妻もすこし意外なやうな顔つきをしてゐた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね。」

「うん。」僕はさう返事ともつかずに言つたまま、桃やら櫻やらまた松の木の間などを、その突きあたりに見える小さな門のはうに向つて往つた。何處かでまた七面鳥が啼いてゐた。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、はひりかけながら、「あ

あ、こんなところに馬酔木あしびが咲いてゐる。」と僕はその門のかたはらに、丁度その門と殆ど同じくらゐの高さに伸びた一本の灌木がいちめんめんに細かな白い花をふさふさと垂らしてゐるのを認めると、自分のあとからくる妻のはうを向いて、得意さうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木あしびの花？」妻もその灌木のそばに寄つてきながら、その細かな白い花を仔細に見てゐたが、しまひには、なんといふこともなしに、そのふつさりと垂れた一と塊りを掌のうへに載せたりして見てゐた。

どこか犯しがたい氣品がある、それでゐて、どうにでもしてそれを手折つて、ちよつと人に見せたいやうな、いぢらしい風情をした花だ。云はば、この花のそんなところが、花といふものが今よりかずつと意味ぶかかつた萬葉びとたちに、ただ綺麗なだけならもつと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられてゐたのだ。——そんなことを自分の傍でもつてさつきからいかにも無心さうに妻のしだしてゐる手まさぐりから僕はふいと、思ひ出してゐた。

「何をいつまでもさうしてゐるのだ。」僕はとうとうさう言ひながら、妻を促した。

僕は再び言つた。「おい、こつちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古さうな池ね。」妻はすぐついて來た。「あれはみんな睡蓮ですか？」

「さうらしいな。」さう僕はいい加減な返事をしながら、その池の向うに見える阿彌陀堂を熱心に眺めだしてゐた。

阿彌陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六七の、ジャケツト姿の少女だつた。

うすぐらい堂のなかにずらりと竝んでゐる金色こんじきの九體佛くたいぶつを一わたり見てしまふと、こんどは一つ一つ丹念にそれを見はじめてゐる僕をそこに殘して、妻はその寺の娘とともに堂のそとに出て、陽あたりのいい縁さきで、裏庭の方かなんぞを眺めながら、こんな會話をしあつてゐる。

「ずるぶん大きな柿の木ね。」妻の聲がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意さうだ。

「何本あるのかしら？ 一本、二本、三本……」

「みんなで七本です。七本ですが、澤山に成りまつせ。九體寺くたいじの柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やります。あてが一人でも腕もいで上げるのだがなあ、そのときのせはしい事やつたらおまへんなあ。」

「さうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

「ほんまに、秋にまたお出でなはれ。この頃は一番あきまへん。なあも無うて……」

「でも、いろんな花がさいてゐて。綺麗ね……」

「そうです。いまはほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲あやめの咲くころもよろしいおまつせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかせまつせ。……」さう言ひながら、急に少女は何かを思ひ出したやうにひとりごちた。「ああ、そやそや、葱とりに往かにやならんかった。」

「さうだつたの、それは悪かつたわね。はやく往つてらつしやいよ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それから二人は急に黙つてしまつてゐた。

僕はさういふ二人の話を耳にはさみながら、九體佛をすつかり見をはると、堂のそとに出て、その縁さきから蓮池のほうをいつしよに眺めてゐる二人の方へ近づいていった。

僕は堂の扉を締めについた少女と入れかほりに、妻のそばになんといふこともなしに立つた。

「もう、およろしいの？」

「ああ。」さう言ひながら、僕はしばらくぼんやりと観佛に疲れた目を蓮池のはうへやつてゐた。

少女が堂の扉を締めおはつて、大きな鍵を手にしながら、戻つてきたので、

「どうもありがたう。」と言つて、さあ、もう少女を自由にさせてやらうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまつせ。」少女は池の向うの、松林のなかに、いかにもさわやかに立つてゐる三重塔のはうへ僕たちを促した。

「さうだな、ついでだから見せて貰はうか。」僕は答へた。「でも、君は用があるんなら、さきにその用をすましてきたらどうだい？」

「あとでもええことだす。」少女はもうその事はけろりとしてゐるやうだつた。

そこで僕が先きに立つて、その岸へには菖蒲のすこし生ひ茂つてゐる、古びた蓮池のへりを傳つて、塔のはうへ歩き出したが、その間もまた絶えず少女は妻に向つて、このへんの山のなかで採れるたけのこ筍だの、まつたけ松茸だのの話をことこまかに聞かせてゐるらしかつた。

僕はさういふ彼女たちからすこし離れて歩いてゐたが、實によくしゃべる奴だなあとおもひながら、それにしてもまあ何んといふ平和な氣分がこの小さな廢寺をとりまいてゐるのだらうと、いまさらのやうにそのあたりの風景を見まはしてみたりしてゐた。

傍らに花さいてゐる馬酔木よりも低いくらゐるの門、誰のしわざか佛たちのまへに供へてあつた椿の花、堂裏の七本の大きな柿の木、秋になつてその柿をハ

イキングの人々に賣るのをいかにも愉しいことのやうにしてゐる寺の娘、どこからかときどき啼きごゑの聞えてくる七面鳥、——さういふ此のあたりすべてのものが、かつての寺だつたそのおほかたが既に廢滅してわづかに残つてゐるきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら——といふよりも、それらの古代のモニュメントをもその生活の一片であるかのやうにさりげなく取り入れながら、——其處にいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもその何處かにすこしく悲愴な懷古的氣分を漂はせてゐる。

自然を超えんとして人間の意志したすべてのものが、長い歲月の間にほとんど廢亡に歸して、いまはそのわづかに残つてゐるものも、そのもとの自然のうち、そのものの一部に過ぎないかのやうに、融け込んでしまふやうになる。

さうして其處にその二つのものが一つになつて——いはば、第二の自然が発生する。さういふところにすべての廢墟の云ひしれぬ魅力があるのではないか？——さういふパセティックな考へすらも（それはたぶんジメルあたりの考へであつたらう）、いまの自分にはなんとなく快い、なごやかな感じで同意せられる。……

僕はそんな考へに耽りながら歩き歩き、ひとりだけ先きに石段をあがり、小さな三重塔の下にたどりついて、その松林のなかから蓮池をへだてて、さつき阿彌陀堂のほうをぼんやりと見かへしてゐた。

「ほんまになあ、しよむないところでおまつせ。あてら、魚食うたことなんぞ、とんとおまへんな。蕨わらびみてえなものばつかり食つてんのや。……筍たけのこは好きだつか。さうだつか。このへんの筍はなあ、ほんまによろしうおまつせ。

それは柔やはうて、やはうて……」

そんなことをまた寺の娘が妻を相手にしやべりつづけてゐるのが下の方から聞えてくる。——彼女たちはさうやつて石段の下で立ち話をしたまま、いつまでたつてもこちらに上がつて来ようとしめない。二人のうへには、何んもなく春めいた日ざしが一ぱいあたつてゐる。僕だけひとり塔の陰にはいつてゐるものだから、すこし寒い。どうも二人ともいい氣もちさうに、話に夢中になつて僕のことなんぞ忘れてしまつてゐるかのやうだ。が、かうして廢塔といつしよに、さつきからいくぶん瞑想的になりがちな僕もしばらく世間のすべてのものから忘れ去られてゐる。これもこれで、いい氣もちではないか。——ああ、またどこかで七面鳥のやつが啼いてゐるな。なんだか僕はこのまますこし氣が遠くなつてゆきさうだ。……

森

その夕がたのことである。その日、淨瑠璃寺じやうるりじから奈良坂を越えて歸つてきた僕たちは、そのまま東大寺の裏手に出て、三月堂をおとづれたのち、さんざん歩き疲れた足をひきずりながら、それでもせつかく此處まで來てゐるのだからと、春日かすがの森のなかを馬酔木の咲いてゐるはうへはうへと歩いて往つてみた。夕じめりのした森のなかには、その花のかすかな香りがどことなく漂つて、ふいにそれを嗅いだりすると、なんだか身のしまるやうな氣のするほどだった。だが、もうすつかり疲れ切つてゐた僕たちはそれにもだんだん刺戟が感ぜられないやうになりだしてゐた。さうして、こんな夕がた、その白い花のさいた間をなんといふこともなしにかうして歩いて見るのをこんどの旅の愉しみにして

来たことさへ、すこしももう考へようともしなくなつてゐるほど、——少くとも、僕の心は疲れた身體とともにほおつとしまつてゐた。

突然、妻がいつた。

「なんだか、この馬酔木と、淨瑠璃寺にあつたのとは、すこしちがふんぢやない？　ここのは、こんなに眞つ白だけれど、あそこのはもつと房が大きくて、うつすらと紅味を帯びてゐたわ。……」

「さうかなあ。僕にはおんなじにしか見えないが……」僕はすこし面倒くささうに、妻が手ぐりよせてゐるその一枝へ目をやつてゐたが、「さういへば、すこうし……」

さう言ひかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にほおつとしてゐる心のうちに、けふの晝つかた、淨瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人でその白い小さな花を手にとりあつて見てゐた自分たちの旅すがたを、何んだかそれがずつと昔の日の自分たちのことでもあるかのやうな、妙ななつかしさでもつて、鮮やかに、蘇らせ出してゐた。